

イスラームの婚姻論比較研究

ガザリー、イブン・アラビー、カラダーウィー

青柳かおる

はじめに

筆者はこれまで、イスラーム思想史上最大の思想家の一人、ガザリー (Abū Ḥamid al-Ghazālī 一一一年没)⁽¹⁾を中心として、預言者ムハンマドの時代から一二世紀初頭までの古典時代のイスラーム思想史における神学、哲学、神秘主義 (スーフイズム) の融合について研究してきた。博士論文では、とくにガザリーとラーズイー (Fakhr al-Dīn al-Rāzī 一二〇九年没) の存在論における思想潮流の融合に関する比較を行った (青柳 2005a)。さらに、

古典時代と現代が結びつく研究を目指し、生命倫理および女性問題をテーマに設定した。そして現代において参照されている古典時代の文献について、生命倫理研究における古典文献の引用回数調査を行ったところ、ガザリーの代表作で四〇書から成る『宗教諸学の再興 (Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn)』の第一二番目の書「婚姻作法の書 (Kitāb Aḥkām al-Nikāḥ)」⁽³⁾が、現代の研究者によって最も多く参照されていることが判明した。そこでこの書の翻訳と分析を行い、スーフイズムからみたガザリーの婚姻論を検討した (青柳 2003; 2005b; Aoyagi 2005)。

続いて、ガザリーの存在論研究と婚姻論研究を統合した上で、ガザリー以降のスーフイズムを代表する思想家であるイブン・アラビー (Ibn al-'Arabi 一二四〇年没) と比較した (青柳 2005c; 2007a; Aoyagi 2006)。最近では、現代の法学者 (ウラマー 'ulama'), カラダーウィー (Yusuf al-Qaradawi 一九二六年-) とガザリーの婚姻論を比較したり (青柳 2008)、生命倫理の主要テーマ、たとえば避妊、中絶、体外受精、代理母、安楽死、脳死、臓器移植、最先端の再生医療などについて現代のムスリム法学者の見解を分析しているところである。⁽⁴⁾

本稿では以上の研究を踏まえ、まず古典スーフイズム文献にみられる婚姻論とその背景にある存在論との結びつきについて、ガザリーとイブン・アラビーを比較し、両者は異なる系列の存在論を説いていることによって、婚姻論も異なっていることを明らかにする。次に、現代のカラダーウィーの婚姻論とガザリーのものを比較し、ガザリーのカラダーウィーに対する影響、およびガザリーとカラダーウィーそれぞれの独自性を検討したい。古典時代と現代のイスラーム思

想史研究は、それぞれ別個の領域で行われることが多いが、婚姻、セクシュアリティ、女性問題に関する研究においても、両者の影響関係を分析した研究はあまりない。このような状況の中で、本稿はイスラーム比較思想の新たな側面を明らかにすることができると思われる。

第一章 ガザリー

ガザリーの存在論

ガザリー研究において重要なテーマのひとつは、コーラン (クルアーン) の記述に基づく神学的存在論における外来の学問である哲学の影響である。イスラーム哲学は古代ギリシアの新プラトン主義の流出論を取り入れたものであり、コーランに述べられているイスラームの伝統的世界観とは異なるものである。コーランの記述を擁護するイスラーム神学の立場によれば、世界は神によって無から創造された。そして神の被造物である世界は原子 (幾何学的な点) から成っており、瞬間ごとに神によって創造される。従って、因果律は否定

され、原因と結果に見えるものは神の慣行ということになる。また不可視界、人間靈魂といった靈的存在者は原子とされる。

これに対し哲学の立場では、世界は神から必然的に流出したものであり、世界は神と共に永遠である。世界で生じる現象は原因と結果の關係であり、因果律によって結びついている。また靈的存在者は非物質的実体とされ、原子とは異なる純粹実体の存在が認められている。後に、この哲学的流出論的世界観は、世界は神の自己顯現とするイブン・アラビーの系列の哲学的スーフィズムにも入っていく。

以上のように神学と哲学は異なる世界観を持つが、ガザリーは神学者であると同時に哲学を学び、批判的に取り入れている。ガザリーは、神学書では原子論の世界観を支持しており、神は非物質的存在であるが世界は原子から成っているとし、両者の隔絶性を説いている。しかしガザリーは、スーフィズムの著作では原子論とは違う系列の存在論を説いており、哲学に接近した靈的世界を認めているのである。⁽⁵⁾

スーフィズムの著作においてガザリーは、世界をムルク界 (*alam al-mulk* 王權の世界、現象界) と、マラクト界 (*alam al-malakut* 主權の世界、不可視界) の二つに分け、二つの世界の対応關係と神秘主義的な人間靈魂の上昇を論じている。マラクト界は天使と靈的存在者の世界であり、ムルク界は現象界、物質的世界である。二つの世界の關係は正反対であり、次元を異にする。しかし両者の間にはつながり、相關關係があり、その關係によって、人間は神に近づくことができる (*Mishkat*, 306)。人間靈魂の上昇の究極地点は、ファナー (*fana* 自己消滅——人間靈魂と神との合一) であり (*Mishkat*, 609)。天国の恩恵(来世での見神)は神への愛の程度により、神への愛は、神に関する真知の程度による。よって現世における神との合一体験の中で神を見る(知ることが多いほど、来世での見神(神の完全な開示)が容易になる (*Ihya'*, Vol. 4, 480)。

ガザリーの神秘主義的存在論をまとめると、以下のようになる。

一 二つの世界は正反対であるが、対応關係がある。

二 その関係があるために、神秘修行によって人間靈魂は二つの世界を上昇し、神と合一できる。

三 神との合一体験の結果、現世で神を見ることになり、それが来世での見神につながる。

「結婚作法の書」におけるガザリーの婚姻論

「婚姻作法の書」は、婚姻の宗教的、社会的な習慣や作法が明らかにされており、とくにガザリーの性に關する言説は多くの研究者の関心を集めてきた。⁽⁶⁾しかし従来の研究では「婚姻作法の書」全体をスーフイズムの視点から詳細に論じたものはほとんどない。以下、ガザリーの理想とする婚姻生活がいかなるものであり、それがどのようにスーフイズムに関わっているかを検討したい。

この書は序論、第一章「婚姻の利点と欠点について」、第二章「守られるべき女性の契約の状態と契約の条件について」、第三章「共同生活の規則、婚姻継続中に起こること、夫婦の義務についての考察」から成っている。ここでは、第一章を中心に、夫が妻の助けによって婚

姻生活において享受する利点について、スーフイズムの視点から要約したい。

まず日常生活において夫は働き、妻は家で家事をすする。夫は家事にわずらわされず、神への崇拜に没頭できる。よって正しい妻と、神へのズイクル (*du'ā* 神に思念を集中しながら短い文言を繰り返し唱えること)⁽⁷⁾と感謝 (*shukr*) は結びついている (*ḥikmah*, Vol. 2: 50)。ズイクルは、觀念 (心) のズイクルと口誦 (舌) のズイクルに分かれる。口誦のズイクルは觀念のズイクルを伴わなければならない。ガザリーは、口誦のズイクル、フィクル (*ḥikmah* 推論的瞑想)、ドゥアー (*du'ā* 祈願)、クルアーン読誦 (*qur'ān*) を四行としており、ズイクルと他の行を合わせた修行を行うことを提唱している (*ḥikmah*, Vol. 1: 521; 中村 1982: 78)。

神への崇拜においてズイクルは最も重要な行のひとつであり、家事をする妻は夫にズイクルと神に感謝する時間を作ることにより、夫を宗教的に助けることになる。しかし、精神的に疲労するため、常に心を集中することは難しい。そこで、妻と楽しく過ごすことに

よって魂を安らかにする必要がある。ガザリーは、心を休めることは、フィクル、ズィクル、ある種の行為によって疲れている者には否定できない利益であると言う (*Ihya'*, Vol. 2, 50)。

性生活については以下のように述べられている。婚姻の最大の利益は、合法的な性行為が可能になることである。それによって、子供が生まれ、さらに姦通が防止される。性交は現世において子孫を残すという意味で重要であるが、来世においても重要である。

欲望の中には、子供を作ることへの要因以外に、他の叡智 (*hikmah*) がある。それは、もしその(現世的)快樂 (*ladhthah*) が続いたとしても、それ(欲望)の満足において、対比され得ないほどの快樂である。それは天国に約束された快樂を示している。実際に体験できない快樂に(向けて人を)促すことは無益である。……現世的快樂の利益の一つは、それが天国でも続くように欲することであり、神への崇拜への原動力 (*ba'ith*) となることである (*Ihya'*, Vol. 2,

45; 青柳 2003, 54)。

現世での性的快樂は、来世での快樂を類推させるものであり、神への崇拜への原動力となる。ガザリーにとって、来世での快樂つまり人間の究極の目標は、コーランにある感覚的な天国の喜びではなく、神の御顔を見ることが、見神である。そのためには夜も昼も、絶え間なくズィクルとフィクルの行に没頭しなければならぬ (*Ihya'*, Vol. 1, 510)。以上のガザリーの婚姻論は、性的快樂を原動力として人間靈魂の上昇を目指す修行論と結びついている。そしてこの婚姻論は、靈魂上昇を可能とする先に述べたガザリーの存在論が思想的背景にあると考えられる。

第二章 イブン・アラビー

イブン・アラビーの存在一性論

イブン・アラビーは、ガザリー以降のスーフィズムを代表する思想家である。スペインのムルシアに生まれ、北アフリカ、エルサレム、メッカなどを遍歴、

シリアのダマスカスで没した。イブン・アラビーが唱えた存在一性論(wahdat al-wujud)は、神秘体験に基づいて世界を神の流出論的顕現と見るものである。神と世界の隔絶性と靈魂の上昇を説くガザリーとは、系列の異なる宇宙論であり、後世の存在一性論学派が体系化した。

存在一性論を体系化したカーシャーニー(ʿAbd al-Razzāq al-Qaṣṣānī 一三二九年没)は、未分化の純粹な存在である神が分節化し、自己顕現していく過程を以下の五つの世界にまとめている(*Isṭiḥḥāt*, 51-52, 89; 東長 1986, 50-52)。

- 一 絶対的一性(ahadiyyah)——一性の本質(dhāt)そのものの顕現の場
- 二 統合的一性(wahidiyyah)——神名の統合の次元
- 三 ジャバルート界(ʿālam al-jabrūt)——神の名前と属性の世界
- 四 マラクート界——不可視界、靈的世界、象徴の世界
- 五 ムルク界——現象界

このように宇宙の階層には五段階があり、これらの諸段階を経て、神は現象界に自己顕現する。神と合一した頂点から人間が世界を見ると、世界は存在そのものである神の顕現として見えてくる。存在一性論は、神と世界の一体性を説く神秘主義的宇宙論なのである。イブン・アラビーと同様の思想はインドの密教にも見られるが、同じ思想が違う地域において、別個に発生することはありうる。存在一性論の発生の起源は、イブン・アラビーがスペイン生まれの思想家であることを考慮すれば、密教の影響の可能性は低いと思われる。

一方、インドでは、一二世紀末から一三世紀初頭以降、本格的なスーフィズムの流入が始まった(Schimmel 1975, 335)。一四世紀までは古典的なスーフィーの著作が継続的に読まれていたが、まもなくイブン・アラビーの著作に対して多くの注釈書が書かれ、存在一性論が普及した。さらに一五世紀末以降は、存在一性論を詩的に表現した神秘主義詩によって、存在一性論の概念は、スーフィーの理論書を読まない多くの人々にまで影響力を持つようになった(Schimmel 1975, 357)。インドには

イブン・アラビーの存在一性論や性の議論が受容される思想的基盤はあったといえよう。

次に、この存在一性論と結び付けて、イブン・アラビーの性の問題、特に女性観に関する議論を検討し、ガザリーと比較したい。

イブン・アラビーの女性観

イブン・アラビーは、ガザリーと同様に性を重視しているが、思想的背景である存在論が異なっているため、それに伴うセクシュアリティの議論も変容した。まず、イブン・アラビーの主著『メッカ啓示』(al-Futūḥāt al-Makkiyyah)の第一章によれば、最初の父である神と、最初の母であるまだ顕現していないものの宇宙的婚姻によって、神の自己顕現である被造物、つまり宇宙が生じる。同様に、人間は性的結合によって神の自己顕現を体験することができる。イブン・アラビーにおいて、男女の婚姻(結合)は、聖霊(父)と四元素(母)との宇宙的婚姻を反映しているため、人間の性的結合は神の創造行為を模倣することになる(Futūḥāt, Vol. I, 138)。

しかし、イブン・アラビーにおいて、スーフイーにとって性行為の目的は、女性の中に神の聖霊を認め、神との一体性を悟ることである(Hoffman 1995, 235-238)⁽⁸⁾。『叡智の台座』(Fusus al-Hikam)の第二十七章にはイブン・アラビーの女性観が述べられている。それによれば男性は、最も完全な神の顕現である女性の中に、神——つまり自分自身、自分の本質——を見ることができ、神を二つの側面から見ることができる。

男性が、女性の中に神(真実在)を見る(shāhada)とき、(影響を受ける)受動者(munīf)の中に神を見ているのである。男性が、女性が彼自身から顕現したものととして、彼自身の中に神を見るとき、彼は、能動者(ʿāziz)の中に神を見ているのである。男性が、彼自身から生まれたものに関心を持たずに、彼自身の中に神を見るとき、仲介なしに(影響を受ける)受動者の中に神を見ているのである。しかしながら、女性の中に神を見ることが、最も完全で完璧である。というのは、彼は、神は能動者であり、

受動者でもあるとして、神を見るからである (Lewis,

Vol. 1, 217; Austin 1980, 275)。

男性(アダム)は、自分(神の顕現)の能動性(イブを生み出した創造者)と受動性(神の被造物)を自分の中に同時に見られない。よって女性(神の顕現≡男性≡創造者、男性から派生した≡被造物)の中に自分自身を見る。女性を見ることは、神の能動的側面と受動的側面両方を見ることである。神と世界は一体であり、性の神秘的意味は、神(女性)と世界(男性)の結合の一体感を感じることである。性的結合により、神と世界との一体感を会得することが、イブン・アラビーにおける性の大きな意義なのである。

まとめ——ガザリーとイブン・アラビーの比較
ガザリーは、存在論においてはムルク界とマラク
ート界との対応関係を重視し、人間靈魂が二つの世界
を上昇し、神との合一に至るとする。ガザリーの記
述は、存在論的であるよりは、むしろ体験的である。

ガザリーの関心は神に向かつての人間の前進の過程であって、到達した時点からの記述、つまり神的下降・一者の流出論的顕現ではなかったということである (中村 2002, 121)。

性の議論においては、禁欲主義も認めているが、一般の修行者を視野に入れ、欲望を信仰の原動力とする方向に変容したのである。性に対する考え方と神秘的義的存在論が一体となった結果、現世での性的快樂が来世での快樂——究極的には見神——を類推させ、性欲は神秘修行を中心とする神への崇拜に励む原動力になるという思想を理論化した。

一方、イブン・アラビーは存在一性論を思想的背景に持つ。ゆえにガザリーとは異なる性の議論を展開している。存在一性論に性の議論を取り入れて、女性是完全な神の顕現であり、女性との一体性が神との一体性と重なるとする。性的結合を、神と世界(人間)との一体性と解釈しているのである。ガザリーとイブン・アラビーは、自らの存在論に適合する形の性の議論を展開しているといえよう。

第三章 カラダーウィー

カラダーウィーの略歴と研究史

カラダーウィーは、一九八〇年以降のムスリム同胞団の中道派を代表する思想家として、アラブ諸国だけでなく世界中のムスリムに大きな影響力を持つ法学者であり、ムスリム同胞団のイデオログである。一九二六年、エジプトに生まれ、一九二八年、父の死により叔父の住むカタールに移り、幼少期を過ごした。一九四〇年、アズハル大学入学のためにエジプトのカイロに戻った。ムスリム同胞団と関わり、投獄された経歴もある。一九五四年、アズハル大学卒業、その後ワクフ省やアズハル機構で勤務した。現在、カタール大学のシャリーア（イスラーム法）・イスラーム学部学部長、ヨーロッパ・ファトワー（法学者の回答 調査協議会会長、国際ムスリム学者協会会長を務める（大川2007）。ファトワー提供ウェブサイト、イスラーム・オンライン（<http://www.islamonline.net>）の中心的人物であり、公式ウェブサイト（<http://www.qaradawi.net>）を公開している。

従来の研究においてカラダーウィーは、一九七〇年代から顕著になるイスラーム復興の文脈で語られることが多い。過激なイスラーム急進主義と反イスラーム主義の中道的な立場についての研究（小杉1994、1996、1997、2006、2007、2014）、現代の諸問題に対するイスラーム的解決に関する研究（池内2009）およびイスラーム的寛容に関する研究（池内2009）がある。また視聴者の質問等に答える衛星放送による、ヨーロッパの移民ムスリムに対する彼の見解の影響力に関する研究（Reaid 2001）もある。しかし婚姻論を取り上げたり、ガザリーなどの古典思想と比較したものはほとんどない。

『イスラームにおける合法と非合法』に

おけるカラダーウィーの婚姻論

カラダーウィーの著『イスラームにおける合法と非合法（*al-Halal wa-al-Haram fi al-Islam*）』は、現代ムスリムが日常生活を送る上で、どのような行為がイスラーム法では許されているもの（ハラル *halal*）なのか、あるいは禁止されているもの（ハラーム *haram*）なのかを知るための

実践的なマニュアルである。この書の第三章「婚姻と家庭生活 (al-Zawāj wa-Hayāt al-Uṣrā) における合法と非合法」の内容は以下の通りである。⁽¹⁰⁾

第一節 「生理的欲求」

性と女性に関する問題——性的衝動、姦通の禁止、

女性の服装規定(後述)

第二節 「婚姻」

イスラーム法に則った婚姻——求婚、婚姻障害、

一夫多妻

第三節 「夫婦関係」

夫婦の性的関係

第四節 「出産計画 (tahdīd al-nasl)」

家族計画 (anzim al-nasl)——避妊と中絶 (isqāt al-haml)

(後述)

第五節 「離婚」

イスラーム法に則った離婚、待婚期間

第六節 「親子関係」

親子間の血縁関係の重要性、養子縁組の禁止、夫

以外の精子を使った人工授精の禁止

以上のようにカラダーウィーの婚姻論は、来世での幸福を目指したガザリーの婚姻論の内容を踏まえた上で、現世で生活していくことにより重点を置いた実践的な内容である。ムスリムは結婚すべきという立場に立つカラダーウィーは、妻子を養うことが負担となるといった結婚の欠点には触れていない。また、複数の妻を持つ男性は、毎晩一人ずつ妻と夜を過ごさなければならぬという規則など、一夫多妻を必要とする状況ではない現代においては、あまり重要ではない問題は取り上げず、女性隔離やヴェール着用に関する「女性問題」や性の問題および生命倫理に関する「家族計画」といった問題を大きく扱っている。

女性問題と家族計画

カラダーウィーが取り上げている上記の六つのテーマは、ガザリーによっても論じられているが、現代において重要であり、かつガザリーが大きな影響を与えている二つのテーマ(女性問題と家族計画)について、ガザリーとカラダーウィーを比較したい。

まず女性問題について、ガザリーによれば、女性
を家の中に隔離するのは、夫の嫉妬を防ぐためであり、
女性は夫の許可なしに外出することはできない (Iḥyā',
Vol. 2, 74⁷⁵)。女性は家にいる方が望ましいが、重要な
用事があるときには夫の許可を得て、外出が許される。
その際はヴェールを着用しなければならない。 (Iḥyā',
Vol. 2, 75)。カラダーウィーによれば、女性は肌を露出
してはいけないが、顔と手をあらわにすることができ
る。そうでなければ寡婦が子供を養い、また貧しい夫
を支援するために働くことが困難になる (Ḥaḥlī, 141)。

次に家族計画について、ガザリーによれば、性交
中断(避妊)について、法学者の間では見解が分かれてい
るが、我々の考えでは、正しいのは、それは許容され
ること(ということである (Iḥyā', Vol. 2, 81))。というのは、母胎
内には何も存在していないため性交中断は犯罪にはな
らないが、中絶はすでに存在するものに對する犯罪だ
からである。もし精子が子宮に着床し、さらにそれが
胎児や凝血になったら犯罪はより深刻になる。もしこ
れに霊が吹き込まれ、被造物が成熟したら犯罪の深刻

さは増加する。生まれた後なら、最も深刻な犯罪にな
る (Iḥyā', Vol. 2, 82)。ガザリーの主張は、「避妊は許容
される。なぜならそれは中絶と嬰兒殺しとは異なるか
らである」というものであり、中絶を犯罪であり、従っ
てハラーム (ḥaram 禁じられた行為) としているが、中絶に
関してはこれ以上詳しく論じていない。⁽¹¹⁾

一方カラダーウィーは、正当な理由があれば避妊は
ハラール (ḥalāl 許される行為) とする。ガザリーの「避妊
はハラール、中絶は妊娠初期からハラーム」とする議論
に賛成し、先に述べたガザリーの性交中断反対者へ
の反論を引用する (Ḥaḥlī, 179)。やうに「胎児に魂が吹き
込まれた後 (二〇日以降) の中絶はハラームであるが、
母親の命に危険があるときは、その後だとしても、例
外的に中絶が行われる」とする現代の法学者の一致した
見解を支持している (Ḥaḥlī, 178-179)。

一二〇日以前の中絶については明言されていないの
で、イスラーム・オンラインにおけるカラダーウィー
の回答(ファトワー・マネージメント・システムに再掲載)を
参照した。妊娠初期から中絶は禁止であるが、不許可

の程度は最初の四〇日以内であれば少なく、容認できる理由があれば許可される。さらに四〇日以降になると不許可の程度が大きくなり、やむをえない理由がある場合のみ中絶が許可される。そして一二〇日を過ぎた場合、母親の命を救うため以外は、胎児の中絶は絶対に禁止である (<http://infad.usim.edu.my/modules.php?op=modoad&name=News&file=article&sid=10777> 二〇一〇年十一月二日アクセス)。

まとめ——ガザリーとカラダーウィーの比較

女性問題について、ガザリーは女性隔離を説く保守的立場であるが、カラダーウィーは働いて収入を得る必要のある女性が、服装などに気をつければ外で働くことができるとする。これは現代において、女性が教育を受けられるようになったこと、そして就職先が増えたことに起因しているといえよう。

また家族計画については、ガザリーは、避妊は認めたが中絶は認めない。また中絶に関する議論はあまり詳しく論じていない。カラダーウィーは、現代ムス

リムの中絶に関する悩みに答える形で、母親が死亡する危険がある場合には中絶を認めている。これは、エジプトなど多くのイスラーム諸国における人口爆発という背景も考えられる。

カラダーウィーは、ガザリーの婚姻論と共通する部分——姦通の禁止、婚姻契約、離婚の方法、女性の振る舞い方——もあるが、その中でも現代社会の要請に応じてガザリーの議論とは異なる見解や、それを補足する見解を述べているといえよう。

おわりに

ガザリーはイスラーム思想史上、とくに幅広いテーマを取り上げている独創的な思想家である。彼はスーフィーでもあり、法学者でもあった。そのため、ガザリーをスーフィズムの思想史の中で考察することもあるが、またスーフィズムとは無関係な法学などの議論の中で論じることもある。ガザリーの広範な分野に及ぶ記述は、古典時代はもちろん、現代においても多くのムスリム思想家によって参照さ

れている。そしてガザリー思想は受容され、また批判されながら大きな影響を与えてきた。ガザリーの思想は、イスラーム思想史の中で一定の基準となると考えられる。本稿はガザリーの思想の中でも婚姻に関する議論に焦点を当て、古典時代のスーフイー、イブン・アラビーと、現代の法学者、カラダーウィーと比較した。本稿は、ガザリーの婚姻論を軸として、古典時代と現代におけるイスラーム思想の展開および多様性を明らかにできたのではないだろうか。

*本稿は、第五回イスラーム・レクチャー（平成二二年一〇月三〇日、於…東洋哲学研究所）における発表に加筆修正したものである。また平成二一〜二二年度科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号二二七二〇〇二二）、平成二二年度新潟大学人文社会・教育科学系研究支援経費（学系奨励研究）および平成二二年度新潟大学プロジェクト推進経費（奨励研究）による研究成果の一部である。

参考文献

Primary Sources

Fuṣṣṭ: Ibn al-'Arabī, *Fuṣṣṭ al-Hikam*, 2 vols. in 1, Beirut: Dar al-Kitaḥ al-'Arabī, 1980.

Funūḥ: Ibn al-'Arabī, *al-Funūḥ al-Makkiyah*, 4 vols., Beirut: Dar Sādir, n.d.

Ḥalāl: Yūsuf al-Qarāwī, *Ḥalāl wa-al-Harām fī al-Islām*, Cairo: Maktabah Wahbah, 2004.

Iḥyā': al-Ghazālī, *Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn*, ed. by Abū Ḥafṣ, 5 vols., Cairo: Dar al-Hadith, 1992.

Isṭilāḥ: al-Qashanī, *Isṭilāḥ al-Sūfiyyah* in D. Pendlebury (ed.), *A Glossary of Sufi Technical Terms*, London, 1991.

Mishkat: al-Ghazālī, *Mishkat al-Anwār*, ed. by A. 'Aḥī, Cairo: al-Dār al-Qawmīyah, 1964.

一次文献

青柳かおる2003『現代に生きるイスラームの婚姻論——ガザリーの「婚姻作法の書」訳注・解説』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

青柳かおる2005a『イスラームの世界観——ガザリーとラズビー』明石書店

青柳かおる2005b『ガザリーの婚姻論——スーフイズムの視点から』『オリエン』第47巻第2号、120-135.

青柳かおる2005c『ガザリーの修行論における性の問題——神祕主義的宇宙論との関係を中心に』『宗教研究』

346号、95-116.

青柳かおる2007「スーフィズムからみた結婚と性の問題」『多

民族社会における宗教と文化』（宮城学院女子大学キ
リスト教文化研究所）第10号、1-23（資料24-33）。

青柳かおる2008「古典時代と現代におけるイスラームの婚姻
論比較研究——ガザリーとカラダーウィー」『史潮』
第63号、64-81。

青柳かおる2010「スーフィズムにおける修行と身体」栗原隆・
辻元早苗・矢萩喜從郎編『空間と形に感応する身体』東
北大学出版会、115-142。

アルカラダーウィー（遠藤利夫訳）2005『イスラームにお
ける合法（ハラル）と非合法（ハラーム）抄訳（一）』
『シャリーア研究』、拓殖大学海外事情研究所、イスラ
ーム研究センター、第2号、159-183。

アルカラダーウィー（遠藤利夫訳）2006『イスラームにお
ける合法（ハラル）と非合法（ハラーム）抄訳（二）』
『シャリーア研究』、拓殖大学海外事情研究所、イスラ
ーム研究センター、第3号、97-142。

池内恵2002a『現代アラブの社会思想——終末論とイスラ
ム主義』講談社、講談社現代新書

池内恵2002b『イスラーム的共存』の可能性と限界——Y・
カラダーウィーの「イスラーム的寛容」論』『現代宗教
（特集）宗教・スピリチュアリティ・暴力』東京堂出版、
71-100。

大川玲子2007「イスラーム教徒の聖典観——現代の若者たち
にとっての「クルアーン（コーラン）」」『国際学研究』、

明治学院大学、第31号、33-54。

ガザリー（中村廣治郎訳）2003『誤りから救うもの——中
世イスラム知識人の自伝』筑摩書房、ちくま学芸文庫

小杉泰1994『現代中東とイスラーム政治』昭和堂

小杉泰2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会

東長靖1986『存在一性論学派の顕現説における「アッラー」の
位階——カーシャーニーとジリーを中心として』『オ
リエント』第29巻第2号、48-64。

中村廣治郎1982『ガザリーの祈禱論——イスラム神秘主義
における修行』大明堂

中村廣治郎2002『イスラムの宗教思想——ガザリーとその
周辺』岩波書店

中村廣治郎2006『「イスラーム」とは何か——その多様性を
考える』『東京大学宗教学年報』第26号、1-11。

マルクス、キング（桜井啓子訳）1995『イスラームと女性』『講
座イスラーム世界 四——イスラームの思考回路』栄
光教育文化研究所、309-364。

Aoyagi, K. 2005. "Al-Ghazālī and Marriage from the Viewpoint of
Sufism," *Orient: Reports of the Society for Near Eastern
Studies in Japan*, 40, 2005, 124-139.

Aoyagi, K. 2006 a. "Spiritual Beings of Fakhr al-Dīn al-Rāzī's Cos-
mology, with Special Reference to His Interpretation of the
Mi'raj," *Orient: Reports of the Society for Near Eastern
Studies in Japan*, 41, 2006, 145-161.

Aoyagi, K. 2006 b. "Transition of Views on Sexuality in Sufism:

- Al-Makki, al-Ghazālī, and Ibn al-'Arabi, "Annals of Japan Association for Middle East Studies (『日本中東学会年報』), 22-1, 2006, 1-25.
- Aligbechi, D. 2007. *Islamic Bioethics: Problems and Perspectives*, [Dordrecht]: Springer.
- Austin, R.W.J. (trans.) 1980. *The Bezels of Wisdom*, New Jersey.
- Bauer, H. (trans.) 1917. *Von der Ehe: Das 12. Buch von Al-Ghazālī's Hauptwerk*, Halle.
- Bercher, L. and G.-H. Bousquet (trans.) 1989. *Le livre des bons usages en matière de mariage: Extrait de l'Ilhyā' 'Ulūlūm ed-Dīn ou: Vivification des sciences de la foi*, Reprint of 1953 ed., Paris.
- Brockopp, J.E. (ed.) 2003. *Islamic Ethics of Life: Abortion, War, and Euthanasia*, Columbia, S.C.: University of South Carolina Press.
- Brockopp, J.E. and T. Eich (ed) 2008. *Muslim Medical Ethics: From Theory to Practice*, Columbia, S.C.: University of South Carolina Press.
- Davidson, A.H. 1992. *Alfarabi, Avicenna, Averroes, on Intellect: Their Cosmologies, Theories of the Active Intellect, and Theories of Human Intellect*, New York / Oxford.
- Elias, J. 1988. "Female and Feminine in Islamic Mysticism," *The Muslim World*, 78, 209-224.
- Farah, M. (trans.) 1984. *Marriage and Sexuality in Islam: A Translation of al-Ghazālī's Book on the Etiquette of Marriage from the Ilhyā', Salt Lake City*.
- Griffel, F. 2009. *Al-Ghazālī's Philosophical Theology*, Oxford: Oxford University Press.
- Frank, R.M. 1994. *Al-Ghazālī and the Ash'arite School*, Durham / London.
- Hammad, Ahmad Zaki (translation review) 1999. *The Lawful and the Prohibited in Islam*, Plainfield, Indiana: American Trust Publications.
- Hoffman, V.J. 1995. *Sufism, Mystics, and Saints in Modern Egypt*, Columbia, S.C.
- Marmura, M.E. 1995. "Ghazalian Causes and Intermediaries," *Journal of the American Oriental Society*, 115, 89-100.
- Murata, S. 1992. *The Tao of Islam: A Sourcebook on Gender Relations in Islamic Thought*, Albany.
- Nakamura, K. (trans.) 1990. *Invocations and Supplications*, Cambridge: The Islamic Texts Society.
- Nakamura, K. 1994. "Imām Ghazālī's Cosmology Reconsidered with Special Reference to the Concept of *tabarrūt*," *Studia Islamica*, 80, 29-46.
- Omran, Abdel Rahim 1992. *Family Planning in the Legacy of Islam*, London / New York: Routledge.
- Rispler-Chaim, V. 1993. *Islamic Medical Ethics in the Twentieth Century*, Leiden: E.J. Brill.
- Road, A.S. 2001. "The Wise Men: Democratization and Gender Equalization in the Islamic Message: Yusuf al-Qaradawi and

Ahmad al-Kubaisi on the Air," *Encounters: Journal of Inter-Cultural Perspectives*, 7 (1), 29-55.

Sachedina, A.A.A. 2009. *Islamic Biomedical Ethics: Principles and Application*. Oxford: Oxford University Press.

Schimmel, A. 1975. *Mystical Dimensions of Islam*. Chapel Hill.

Schimmel, A. 1979. "Eros—Heavenly and Not So Heavenly—in Sufi Literature and Life," in A.L. al-Sayyid-Marsot (ed.), *Society and the Sexes in Medieval Islam*, Mahbu, 119-141.

Schimmel, A. 2003. "Women in Mystical Islam," in S.T. Bryan (ed.), *Islam, Gender and the Family*, London, 145-153.

Watt, W.M. 1949. "A Forgery in al-Ghazali's *Mishkat*," *Journal of the Royal Asiatic Society*, 5-22.

注

(1) ガザリーの生涯については、中村1982, 1-25参照。自伝『誤りから救うもの (*al-Munqidh min al-Dalal*)』の翻訳は、ガザリー 2003がある。

(2) 「中世イスラーム」とは、「一二世紀から一九世紀の近代に至るまでのスーフィズムの影響を強く受けたイスラームである (中村2006, 5)」。それ以前の古典イスラームが、現代において理想とされている。

(3) *Ihya'*, Vol. 2, 34-95. 〃の書の翻訳は、Farah 1984; Bercher and Bousquet 1989; Bauer 1917; 青柳 2003参照。なおガザリーのテキストおよび翻訳等が掲載されているサイトとして <http://www.ghazali.org> がある。

(4) 最近のイスラームの生命倫理研究については、Rispler-Chaim 1993; Brockopp 2003; Aughtechi 2007; Brockopp 2008; Sachedina 2009などを参照。またイスラーム・オンラインやイスラーム・シティー (<http://www.islamicity.com>)、ファットワー・ブネージメント・システム (<http://infad.usim.edu.my>) とったファットワー提供ウェブサイトにおける関連する質問に対する法学者の回答も参照。

(5) ただし、ガザリーが神学的偶因論を支持していたのか、哲学的因果律を支持していたのかについては研究者の見解は異なる。因果律や原子論に関するガザリーにおける哲学の影響については、ガザリーを神学的立場に忠実とみるもの (Watt 1949)、神学者ではなく哲学者とみるもの (Davidson 1992; Frank 1994; Griffel 2009)、哲学の影響を強く受けつつ、神学の立場に留まっていたとみる研究がある (Marmura 1995; 中村 2002)。本稿ではこの問題には立ち入らないが、ガザリーが神学的原子論には限界を感じ、哲学で認められていた非物質的実体を存在論に取り入れたことを指摘しておきたい。

(6) 「婚姻作法の書」の研究史については、青柳 2005 b; 青柳 2007参照。

(7) ズィクルについては『宗教諸学の再興』第九番目の書「ズィクルとドゥアア」の書 (翻訳は Nakamura 1990) および中村1982参照。またズィクルと歌舞音楽を伴うサ

マー (sana) については青柳2010参照。

(8) イブン・アラビーの女性観に関するその他の研究として、Schimmel 1979; Schimmel 2003; Elias 1988 参照。

(9) この書の翻訳は、Hammad 1999 参照。また日本語の抄訳はアルカラダーウィー 2005、アルカラダーウィー 2006 参照。

(10) 紙幅の関係で第三章の内容を紹介できなかった。詳しくは青柳 2008 参照。

(11) 古典時代のスンナ派四大法学派は、一二〇日以前の中絶については、法学派によっても、そして法学派の内部においても一致していない (Katz 2003, 30-31)。ハナフィー学派は一二〇日以前の中絶を認めるが、シャーフイー学派は意見が異なる。ガザーリーは禁止とし、四〇日以内、または一二〇日以内なら容認するという見解の法学者もいる。マリーク学派はいかなる場合も禁止している。ハンバル学派では四〇日以内なら許される (Orman 1992, 190-192)。

(あおやぎ かおる／新潟大学准教授)